



TITLE:

Deus ex machina なしの図書館改革 再論流産の記

AUTHOR(S):

松田, 芳郎

CITATION:

松田, 芳郎. Deus ex machina なしの図書館改革再論流産の記. 経済資料
研究 2008, 38: 112-113

ISSUE DATE:

2008-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85107>

RIGHT:

Deux ex machina なしの図書館改革再論流産の記

松 田 芳 郎

(一橋大学・東京国際大学名誉教授、青森公立大学教授)

経済資料協議会の解散に際し『経済資料研究』の終刊号に字数制限無しの投稿呼びかけがあった。それで、この雑誌に書いた「Deux ex machina なしの図書館改革」の続稿、デジタル情報化時代での図書館のあり方の再検討を書くつもりで資料を準備していたが、急に 800 字に制限という通知が届いた。協議会を永年支えていた川原和子さんの遺稿・回想集『女性司書の足あと』が届いた日でもあり、複雑な思いにとらわれた。川原さんは、上記の拙稿が面白いといった数少ない人の一人で、他にも上記の稿に興味を示した前田昇三さんや生島芳郎さんなど親しかった人の大部分は鬼籍に入った。経済資料協議会の衰退の遠因は、総合図書館は排除して学部・研究所等のみに機関加盟を認めた原則にあったのではないかと思っている。

「川原和子さんのくれた版画」(上掲書、(35) - (37) ページ)にも記したが、小樽商科大学は古瀬大六先生の配慮で学内機関の経済研究所で機関加盟した。私はその後一橋大学経済研究所附属日本経済統計文献センターに配置換えの際、「経済資料協議会にセンターは機関として再加入して欲しい」を移籍の条件にしたが、転出の取り決めがほぼ決まった段階で断られた。本来、日本学術会議の勧告で全国共同利用機関として設立された組織であるので移籍する気持ちになったのと思ったが、赴任を断る時期を逸してしまった。助教授として赴任したが、付属施設は本体の経済研究所の意向に逆らうことができず、センター長は所長兼任でセンター主任という「代官」が研究所本体の部門から派遣されその管理下にあった。この状況から脱却するには、細谷新治先生の後をついで正教授になってからでも何年もかかった。自主権確保のために、学会の支持が必要と判断して日本統計学会で毎年センターの事業に関連した報告を行うことをした。機関加入してな

かったが、前田さんたちに依頼されて経済資料協議会のために文部省の科学研究費を何度も何年も獲得し、協議会のためにさまざまな活動を試みた。しかしそれらの試みも、前田さん達が機関加盟機関から退職した後の経済資料協議会の興味を引かなかったようである。

日本学術会議の図書館情報関係の専門委員を永年続けていたが、18-19と2期、第3部の経済統計研究連絡委員会委員長として会員になったが、選ばれて学術基盤情報常置委員会の委員長も勤めいくつかの対外報告をまとめた。その間国際ドキュメンテーション連盟 FID の崩壊にも立ち会った。そういう学術情報社会の変動は、残念ながら経済資料協議会の人たちの関心を引かず報告を求められなかったし、その対外報告が協議会の活動に影響も与えることなく、任期が終わった。時代の変化を反映して経済資料協議会が存続の工夫は出来なかったかを、書いて残したかった。

経済資料協議会と出会わなければ・・・

大日方 祥 子

(日本大学生産工学部)

現在は経済学と縁の薄い工学系の、しかも図書館ではなく入試センターという、言わば大学の営業部門に勤務していて、日々受験生集めと、各種入試の準備や実施に追われる仕事をしています。

30歳代後半という仕事が面白くてしょうがない時期に経済資料協議会（以下、経資協）と出会い、その活動に参加してのめりこんで行きました。加入してまもなく『文献季報』の危機に直面し、季報検討委員会に加わり、声の大きいのと図々しさが災いしてその後の東部会総会で、日大経済学部が理事機関に選出されてしまいました。さあ大変、日大経済の現場はそんな大それた役を引き受ける雰囲気では決し